

記 録

文書番号	SCJ第20期200911-20470200-003
委員会等名	日本学術会議 健康・生活科学委員会 健康・スポーツ科学分科会
標題	健康・スポーツ科学関連分野の学術研究団体における男女 共同参画に関する調査結果
作成日	平成20年（2008年）9月11日

※ 本資料は、日本学術会議会則第二条に定める意思の表出ではない。掲載されたデータ等には、確認を要するものが含まれる可能性がある。

記 録

健康・スポーツ科学関連分野の学術研究団体における
男女共同参画に関する調査結果



2008年9月11日

日本学術会議 健康・生活科学委員会
健康・スポーツ科学分科会

第20期日本学術会議健康・生活科学委員会 健康・スポーツ科学分科会は、「健康・スポーツ科学関連分野における学術の促進」について審議し、女性研究者の育成については、その実態を把握する必要があると結論し、実態調査を行うこととなった。本分科会では、調査結果を、本分野における男女共同参画の推進の基礎資料として役立てるために「記録」として残すこととした。

健康・スポーツ科学分科会

委員長	加賀谷淳子 (第二部会員)	日本女子体育大学客員教授
副委員長	福永哲夫 (連携会員)	鹿屋体育大学学長
幹事	田畑 泉 (連携会員)	国立健康栄養研究所健康増進プログラムリーダー
幹事	田原淳子 (連携会員)	国土舘大学体育学部准教授
委員	跡見順子 (連携会員)	東京大学名誉教授
委員	大築立志 (連携会員)	東京大学大学院総合文化研究科教授
委員	大平充宣 (連携会員)	大阪大学大学院医学系研究科教授
委員	岡田知雄 (連携会員)	日本大学医学部准教授
委員	栗原 敏 (連携会員)	東京慈恵会医科大学学長
委員	下光輝一 (連携会員)	東京医科大学医学部教授
委員	杉原 隆 (連携会員)	十文字学園女子大学特任教授
委員	寒川恒夫 (連携会員)	早稲田大学スポーツ科学学術院教授
委員	高橋健夫 (連携会員)	日本体育大学体育学部教授
委員	高松 薫 (連携会員)	流通経済大学スポーツ健康科学部教授
委員	田口貞善 (連携会員)	奈良産業大学ビジネス学部教授
委員	福林 徹 (連携会員)	早稲田大学スポーツ科学学術院教授
委員	吉岡利忠 (連携会員)	弘前学院大学学長

「健康・スポーツ科学関連分野における男女共同参画」調査ワーキング

主査：田原淳子

跡見順子、田畑 泉、吉岡利忠

協力者：高峰 修 (明治大学政治経済学部専任講師)

目次

1. はじめに	3
2. 調査報告	3
(1) 調査の目的	3
(2) 調査の方法	3
(3) 分析の方法	3
(4) 調査の結果	4
1) 団体内の既存調査	4
2) 団体の人数構成について	4
① 団体の規模	4
② 会員の男女比	5
③ 組織運営における女性の参画	5
3) 団体の運営について	8
① 役員選出方法	8
② 役員選出の際の工夫	9
4) 行事の運営について	9
① 施設設置	9
② 学会大会における登壇者	9
③ 学会大会等におけるテーマ設定	10
5) 研究成果の評価について	11
① 研究誌における論文著者	11
② 学会賞の設置と受賞	11
6) 男女共同参画の取り組みについての意見・感想	12
(5) 調査結果のまとめ	13
3. 本調査の意義	16
4. 今後の課題 ー学術研究団体における男女共同参画の推進に向けてー	16
注	17
資料	19

1. はじめに

1999年に男女共同参画社会基本法が施行され、男女共同参画は「人権の世紀」と呼ばれる21世紀の「我が国の最重要課題」として位置づけられている。「男女共同参画基本計画（第2次）」（2005年12月閣議決定）には、指導的地位に占める女性の割合が2020年までに少なくとも30%程度になるように期待するという目標が明記された。2007年の研究者に占める女性の割合は12.4%であり、日本の学術分野における男女共同参画の状況は、世界的に見ても極めて不十分であるとの見解が示されている^{注1)}。

日本学術会議では、第17期以来この問題に熱心に取り組んできており^{注2)}、第20期には2006年に全大学を対象としたアンケート調査を実施している。また、学協会では、応用物理学会・日本物理学会・日本化学学会等を中心に、2003年に男女共同参画学協会連絡会が設立され、2004年に39学協会の全会員対象のアンケート調査^{注3)}が実施され、2007年にはその第2回目の調査が行われた。

国大協は2010年までに国立大学女性教員比率を20%にするとの目標を掲げ、大学独自の男女共同参画の動きも本格化している^{注4)}。

このように、近年、組織としての大学、および個人としての学協会会員を対象とした調査・報告が進んでいるが、学協会自体、特に健康・スポーツ科学関連分野を対象とした調査はまだ実施されていない。そこで、本健康・スポーツ科学分科会では、関連学術研究団体における調査を実施し、継続的な調査も視野に入れて、当該分野における男女共同参画の現状把握に努めることとした。

2. 調査報告

(1) 調査の目的

健康・スポーツ科学関連の学術研究団体における男女共同参画に対する取組みと現状を把握し、本分野の発展にむけて、今後の取組みを検討する際の基礎資料とする。

(2) 調査の方法

日本学術会議 健康・生活科学委員会 健康・スポーツ科学分科会が連携している学術研究団体を対象にメールによるアンケート調査を実施した。なお、比較のために、看護学分科会にも協力を依頼した。調査時期は、2007年11月～2008年4月である。回答が得られた団体数は以下のとおりである（50音順）。

学協会の関連分科会	回収数（回収率%）
健康・スポーツ科学分科会 関連	22 (61.1)
看護学分科会関連	9
計	31

◆健康・スポーツ科学分科会連携団体

大阪体育学会、日本アダプティッド体育・スポーツ学会、日本運動・スポーツ科学学会、日本運動生理学会、日本健康行動科学学会、日本子ども健康科学学会、日本スポーツ教育学会、日本スポーツ史学会、日本スポーツ人類学会、日本スポーツとジェンダー学会、日本スポーツ方法学会、日本整形外科スポーツ医学会、日本体育学会、日本体育・スポーツ哲学学会、日本体操学会、日本体力医学会、日本トレーニング科学学会、日本陸上競技学会、比較舞踊学会、舞踊学会、バレーボール学会、ランニング学会

◆看護学分科会連携団体

日本看護科学学会、日本看護歴史学会、日本がん看護学会、日本災害看護学会、日本循環器看護学会、日本小児看護学会、日本助産学会、日本生殖看護学会、日本糖尿病教育・看護学会

(3) 分析の方法

分析は、以下の3つの観点から分類して比較・検討を行った。

◆連携分科会別：健康・スポーツ科学分科会の連携団体、看護学分科会の連携団体

◆健康・スポーツ科学系団体における女性会員の割合別：女性会員の割合が低い（4割未満）グループ、女性会員の割合が高い（6割以上）のグループ

◆健康・スポーツ科学系団体における分野別：人文社会科学系、自然科学系、運動科学系、総合領域
人文社会科学系；日本スポーツ人類学会、スポーツ史学会、日本体育・スポーツ哲学学会、日本スポーツ教育学会（4団体）

自然科学系；日本体力医学会、日本トレーニング科学学会、日本運動・スポーツ科学学会、日本整形外
科スポーツ医学会、日本運動生理学会（5団体）

運動学系；比較舞踊学会、舞踊学会、日本陸上競技学会、日本スポーツ方法学会、バレーボール学会、
ランニング学会、日本体操学会（7団体）

総合領域；日本健康行動科学学会、日本アダプティッド体育・スポーツ学会、日本スポーツとジェンダ
ー学会、大阪体育学会、日本子ども健康科学学会、日本体育学会（6団体）

(4) 調査の結果

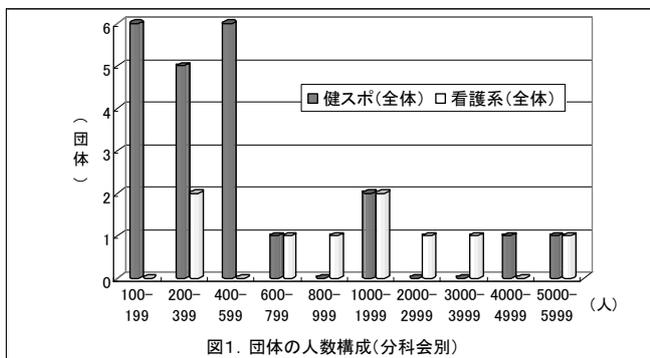
1) 団体内の既存調査

過去に、団体内で男女共同参画に関する調査を実施したことがあるかという質問に対し、「はい」と回答した団体はみられなかった。従って、本調査は回答が得られたすべての対象団体にとって最初の男女共同参画に関する調査になった。

2) 団体の人数構成について

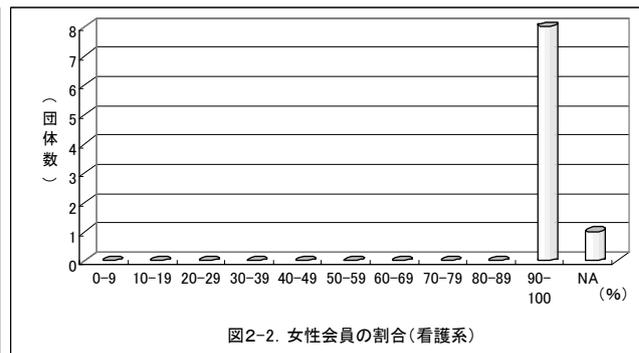
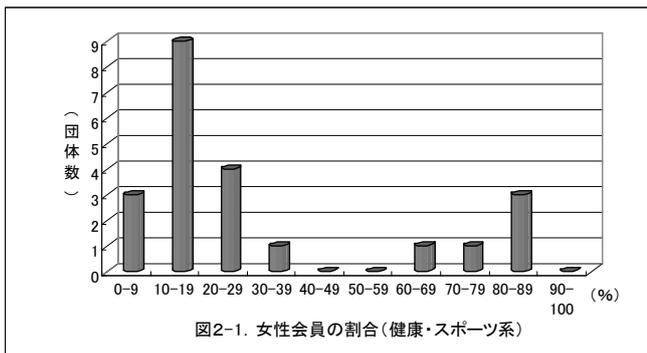
① 団体の規模

健康・スポーツ科学系団体は、看護学系団体に比較して、比較的小規模な団体が多く、会員600人以下の団体が健康・スポーツ科学系団体の77.3%を占めた（図1）。

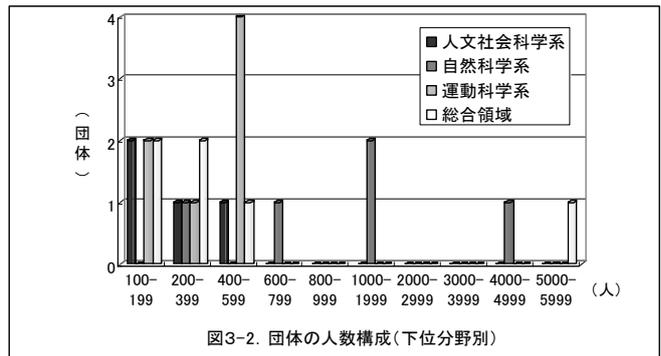
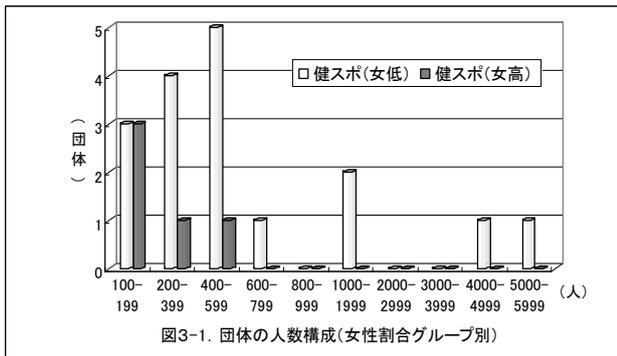


女性会員の割合別グループ	団体数	割合
低グループ	17 団体	77.3%
高グループ	5 団体	22.7%

分科会別に、女性会員の割合ごとの団体数を示したところ、健康・スポーツ科学系では、女性会員の割合が4割未満と6割以上に二分された（図2-1）。そこで、健康・スポーツ科学系団体では、この女性割合の低いグループと高いグループを分類項目として以後の分析を進めることにした（上表）。一方、看護学系団体では、女性会員9割以上の団体がほとんどであった（図2-2）。

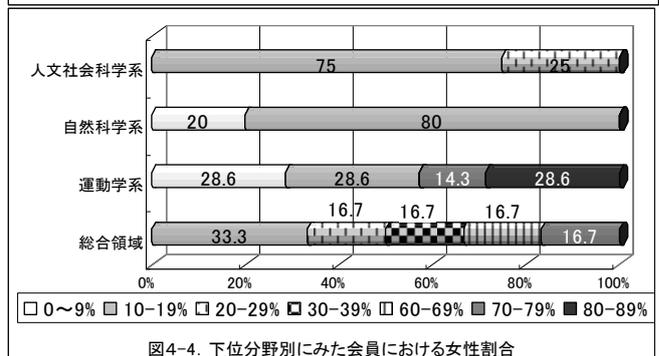
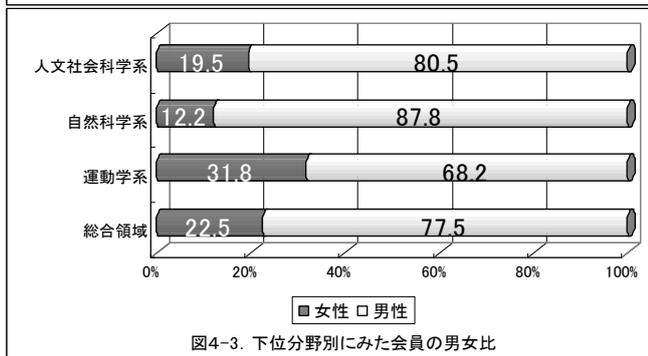
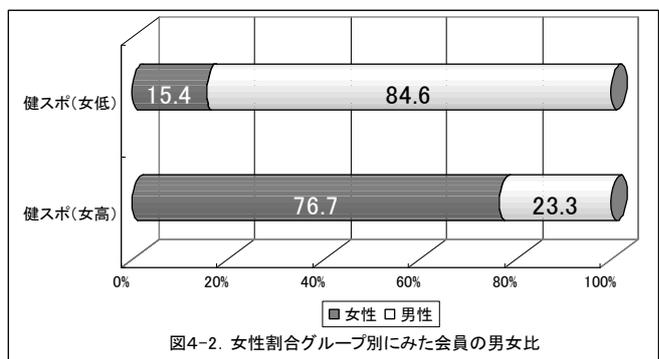
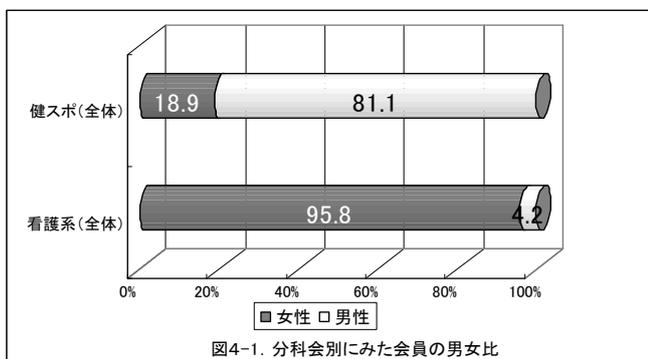


健康・スポーツ科学系団体において、女性会員の割合が高い団体は、いずれも会員 600 人以下で、そのうち会員 200 人以下の小規模団体が半数以上を占めた（図 3-1）。下位分野別に団体の規模をみると、自然科学系団体に規模の大きい団体が多くみられた（図 3-2）。



② 会員の男女比

分科会別に連携団体の会員の男女比をみると、健康・スポーツ科学系団体全体では、女性の割合が 18.9%と 2 割に満たないが、看護学系団体では 95%以上を占めていた（図 4-1）。健康・スポーツ科学系団体のうち、女性会員の割合が高いグループでは、女性会員割合の平均は 76.7%であり、低いグループでは 15.4%であった（図 4-2）。下位分野別にみると、運動学系団体が 31.8%と最も女性会員の割合が高く、最も少ないのは自然科学系団体（12.2%）であった（図 4-3）。さらに、各下位分野を構成する団体の、女性会員の割合を示したものが図 4-4 である。運動学系団体では団体による差が大きく、女性会員の割合が高い団体と低い団体に明確に二分され、前者は舞踊や体操に関する団体であった。

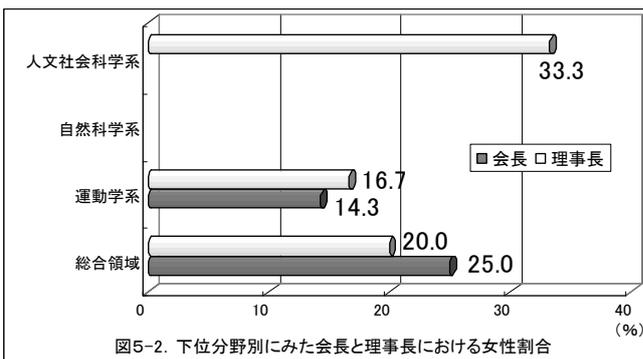
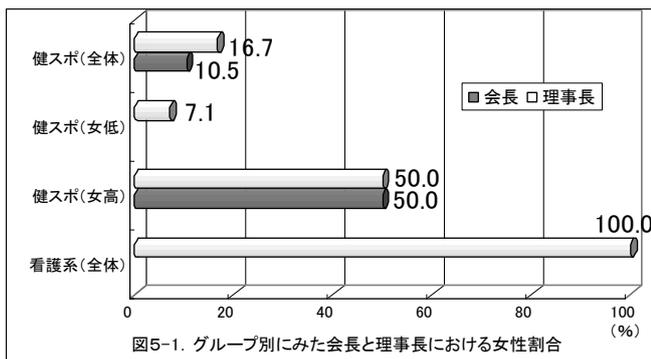


③ 組織運営における女性の参画

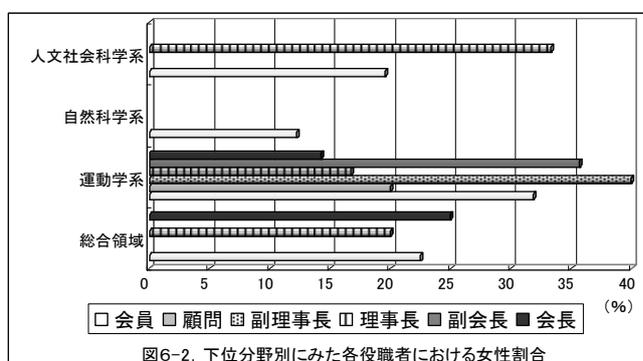
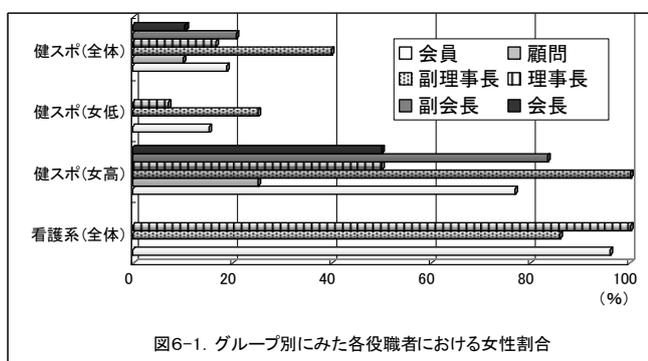
a. 団体の代表者

団体を率いる会長と理事長を取り出して女性の割合をみると、女性会員の割合が高いグループではいずれも 5 割を占めたが、女性会員の割合が低いグループでは、女性の会長は不在であった（図 5-1）。看護系団体には会長職が存在せず、理事長が組織のトップであった（図 5-1）。下位分野別にみると、自然

科学系団体には会長・理事長とも女性が不在であった（図 5-2）。

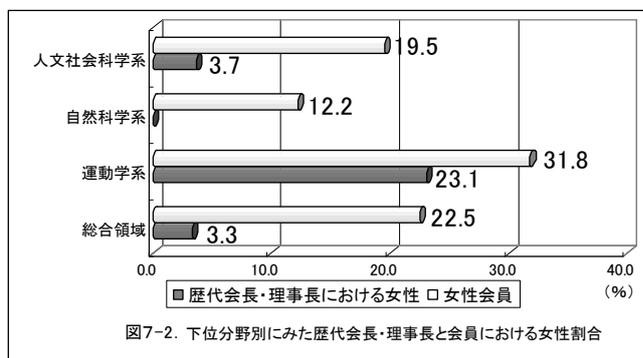
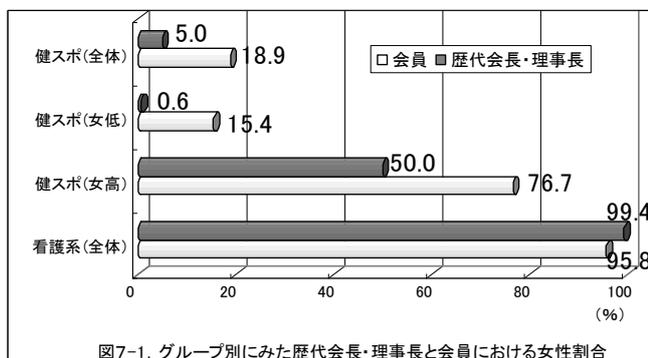


次に、副会長、副理事長、顧問を含めて、女性の割合を比較したところ、健康・スポーツ科学系の団体では、いずれのグループでも会長より副会長が、また理事長よりも副理事長の女性割合が高い(図 6-1)。下位分野別にみると、自然科学系団体ではすべての役職に女性が不在であった(図 6-2)。



b. 歴代会長・理事長

健康・スポーツ系学会全体では、女性会員の割合に比して女性の歴代会長・理事長が占める割合は低く、その傾向は特に女性会員の割合が低いグループにおいて顕著であった(図 7-1)。これに対し看護学系団体では、逆に女性の歴代会長・理事長が占める割合が女性会員の割合よりも高い傾向がみられた(図 7-1)。下位分野別にみると、運動学系団体において比較的高い歴代会長・理事長の割合が示された(図 7-2)。



c. 意思決定機関の役員

理事会、常任理事会、評議員会を含む意思決定機関全体における女性の割合と会員の女性割合を比較すると、健康・スポーツ科学系では、女性会員の割合の高低にかかわらず、いずれのグループも意思決定機関の女性の割合は女性会員の割合よりも低かった(図 8-1)。このことは、女性会員の人数が少ないだけでなく、会員人数からみても意志決定機関の女性の人数は男性より少ないことを意味している。

下位分野別では、運動学系団体においては女性会員の割合よりも意思決定機関における女性の割合が顕著に高い(42.1%)が、自然科学系団体では、女性会員の割合の約半分(6.6%)に留まった(図8-2)。さらに、各下位分野の団体を見ると、いずれの分野も半数以上の団体で意思決定機関の女性割合は19%以下であった。意思決定機関の女性割合が5割を超えていたのは運動学系団体の約4割と総合領域の一部の団体であった(図8-3)。

会員と意思決定機関におけるそれぞれの女性割合の関係をみると、女性会員の割合が7割以上を占めると、意思決定機関における女性の割合が5割を超えていた。女性会員の割合が2割前後の団体においては、意思決定機関における女性割合が2~4割程度の団体がみられたものの、女性会員の割合が7割未満の多くの団体で、意思決定機関の女性割合が2割に満たなかった。(図8-4)。

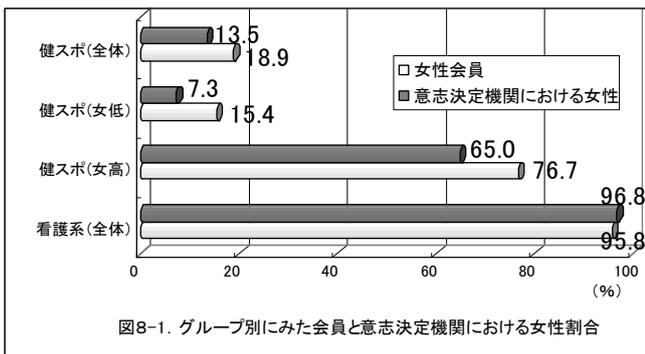


図8-1. グループ別にみた会員と意思決定機関における女性割合

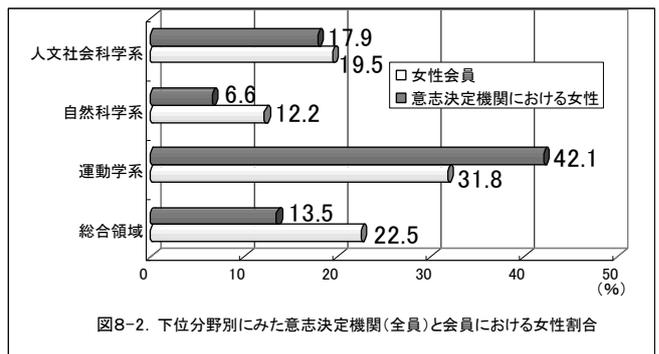


図8-2. 下位分野別にみた意思決定機関(全員)と会員における女性割合

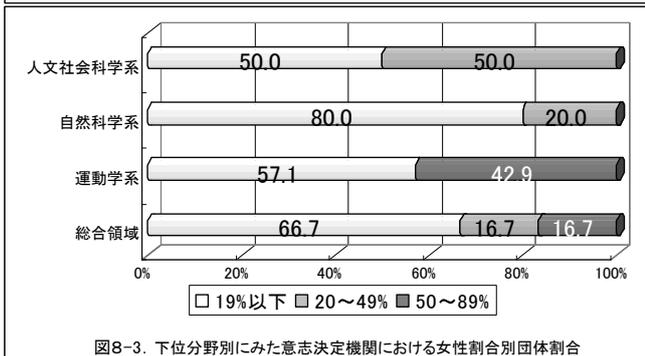


図8-3. 下位分野別にみた意思決定機関における女性割合別団体割合

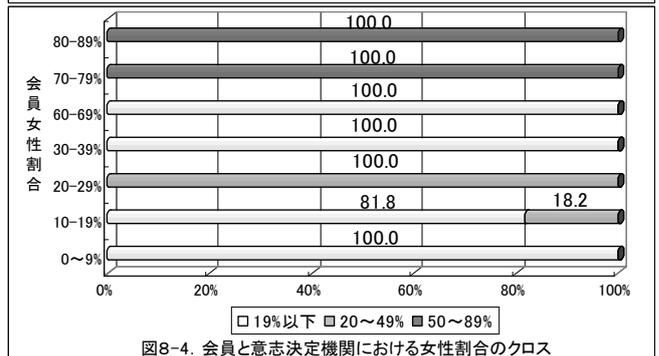


図8-4. 会員と意思決定機関における女性割合のクロス

次に、女性会員の割合別に、理事・常任理事・評議員の女性割合と女性会員割合を比較した。女性の会員割合の低いグループでは、女性会員15.4%に対し、女性理事10.7%、女性会員割合の高いグループでは、女性会員76.7%に対し、女性理事が57.8%であり、いずれも会員割合より低かった(図9-1)。下位分野別にみると、自然科学系団体では女性会員12.2%に対し、女性理事は7.6%と低かったが、運動学系団体では会員・理事とも約3割を占め、評議員や常任理事ではさらに高い割合が示された(図9-2)。

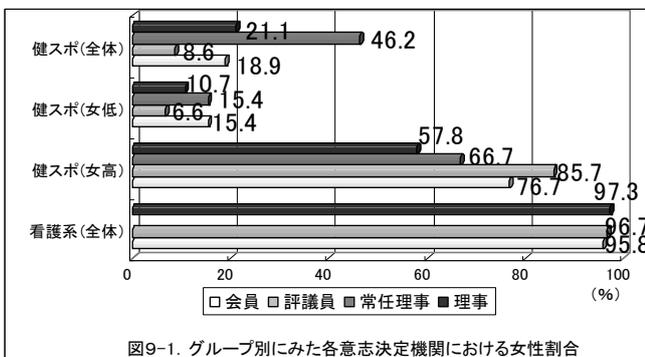


図9-1. グループ別にみた各意思決定機関における女性割合

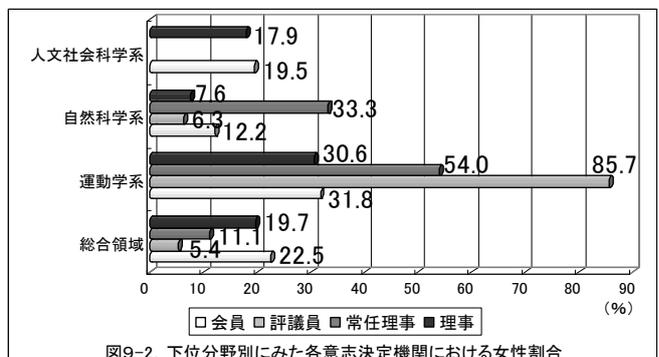
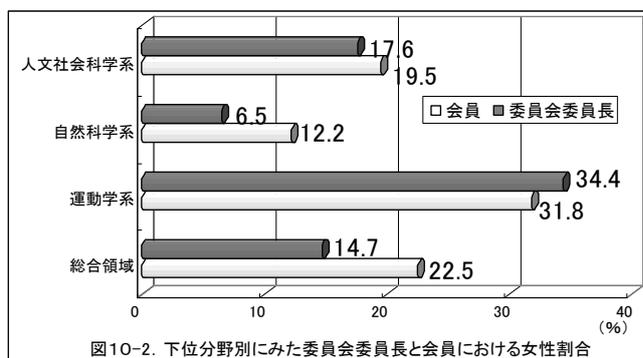
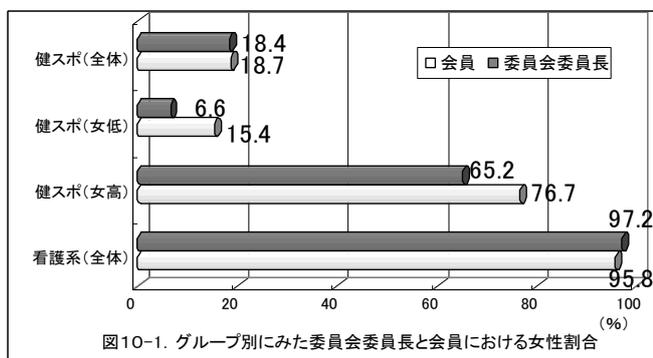


図9-2. 下位分野別にみた各意思決定機関における女性割合

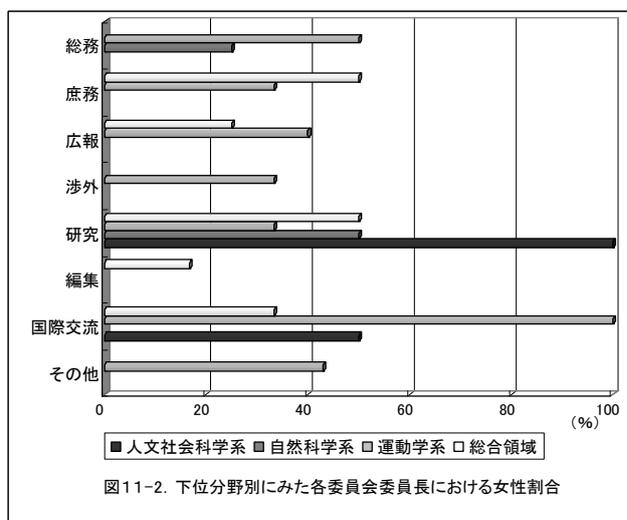
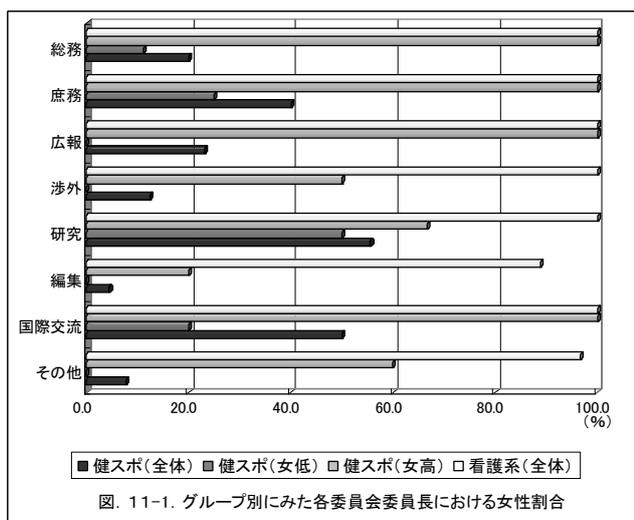
d. 委員会委員長

健康・スポーツ科学系団体において、委員会委員長(全体)の女性割合は、女性会員の割合が低いグ

グループ、高いグループとも、女性会員の割合を下回ったが、健康・スポーツ科学系全体では、女性委員長の割合と女性会員の割合がほぼ同じだった（図 10-1）。これは各グループの母数のちがいが反映されたものである。一方、下位分野別にみると、運動学系団体で女性委員長の割合が女性会員の割合を上回ったが、それ以外の分野では女性会員の割合を下回った（図 10-2）。



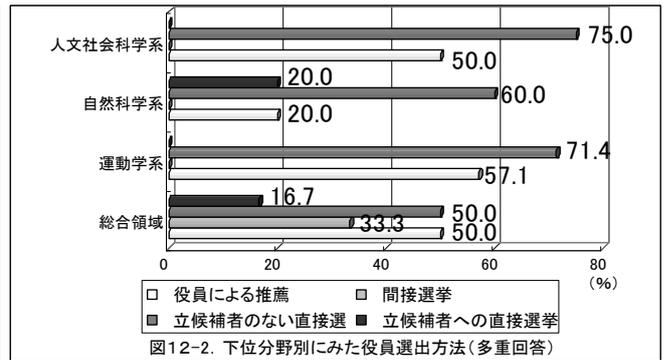
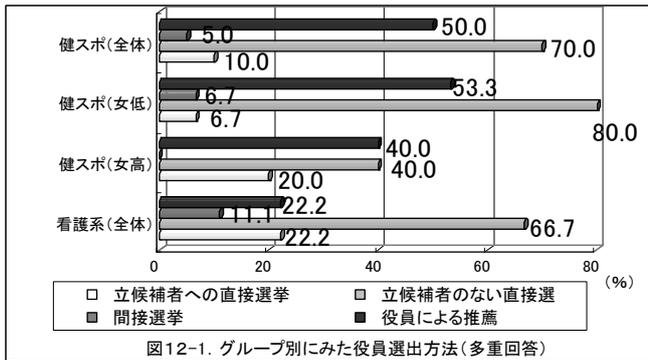
次に、委員会の種類別に委員長の女性割合をみると、健康・スポーツ科学系全体では、研究委員会と国際交流委員会、庶務委員会が 5 割に達しているが、編集委員会と渉外委員会では女性委員長の割合が低かった（図 11-1）。また、編集委員会は看護系団体においても他の委員会より女性委員長の割合が低い傾向がみられた（図 11-1）。下位分野別にみると、運動学系団体は編集委員会を除くすべての委員会で女性の委員長がみられたが、自然科学系団体では研究委員会と総務委員会、人文社会科学系団体では研究委員会と国際交流委員会において女性委員長がみられた（図 11-2）。



3) 団体の運営について

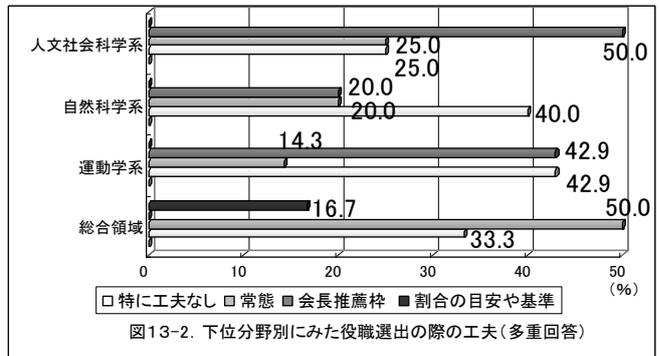
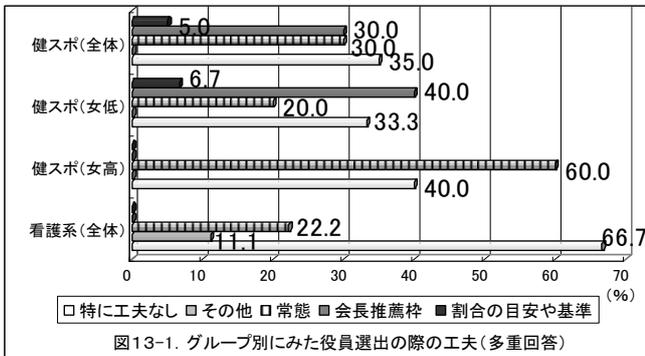
① 役員選出方法

意思決定機関において議決権をもつ役員選出方法については、いずれのグループでも「立候補者のない直接選挙」が最も高い割合を示したが、看護学系団体と比較した場合、「役員による推薦」の割合が高いのが健康・スポーツ科学系団体の特徴であるといえる（図 12-1）。下位分野別にみると、「間接選挙」を用いているのは総合領域の団体だけであった（図 12-2）。



② 役員選出の際の工夫

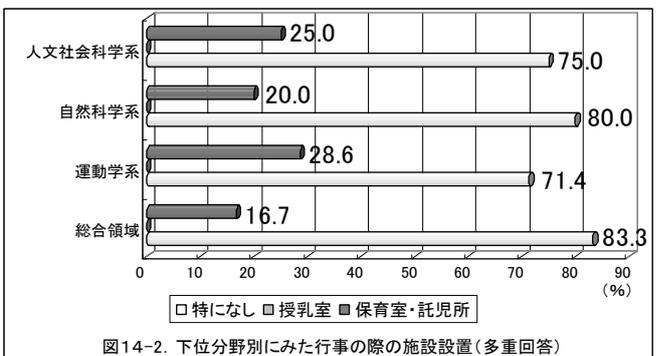
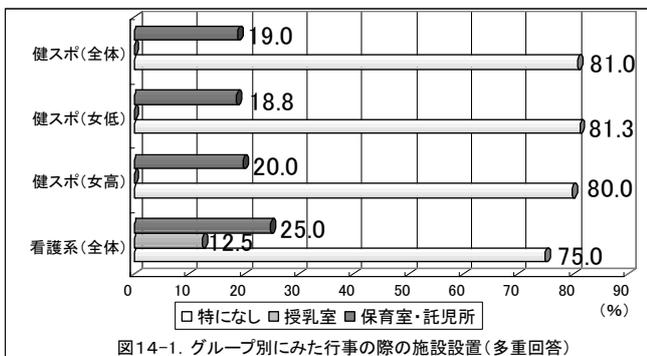
役員選出の際に性別による偏りが生じないように工夫をしているかについては、女性の会員割合が高いグループほど「特に工夫はしていない」傾向がみられた。逆に女性会員の割合が低いグループでは、40%の団体で「会長推薦枠などで補う」と回答していた(図13-1)。下位分野別にみると、「会長推薦枠などで補う」傾向が高いのは人文社会科学系と運動学系の団体であり、総合領域の団体では明確な基準として「両性が一定以上の割合になるように割合の目安や基準を設けている」団体がみられた(図13-2)。



4) 行事の運営について

① 施設設置

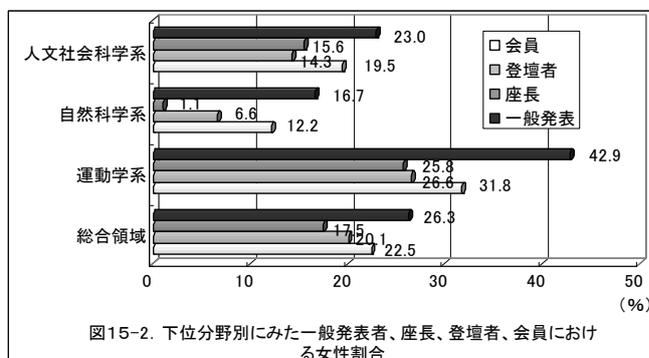
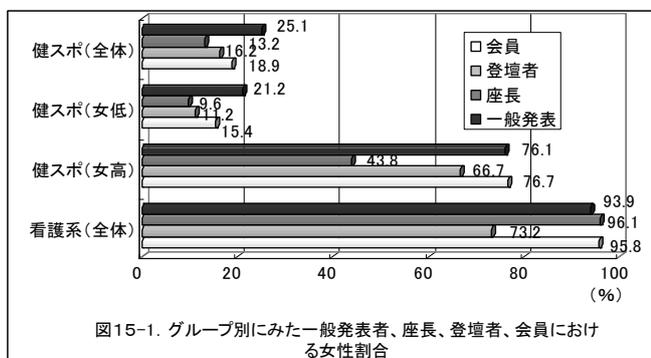
学会大会などの際の男女共同参画を促進する施設設置の有無については、約2割の団体で「保育室・託児所」を設置しており、女性会員の割合が高いグループほど設置の割合が高い傾向がみられた。看護学系団体では「授乳室」を設置している団体も12.5%みられた(図14-1)。下位分野別にみると、「保育室・託児所」の設置は、運動学系団体において最も高く、総合領域の団体で最も低い傾向がみられた(図14-2)。



② 学会大会における登壇者

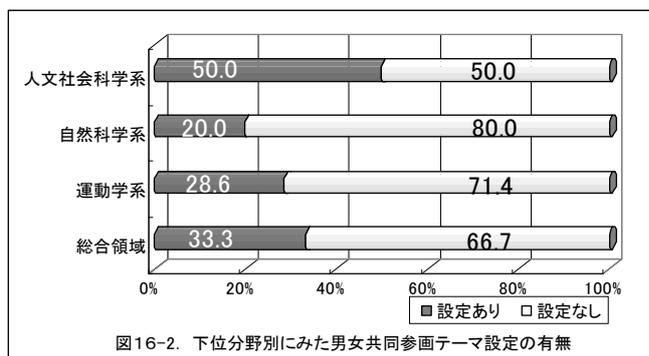
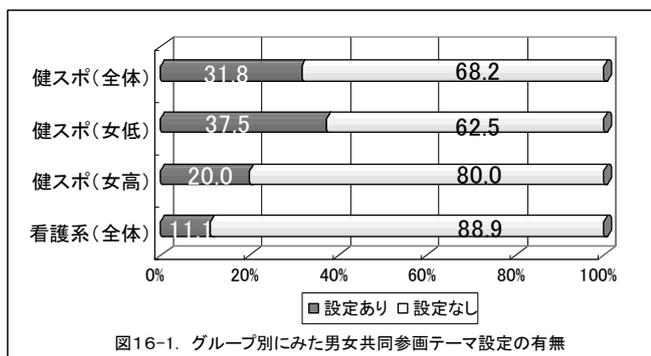
学会大会における女性の一般発表者、座長、講師やシンポジストなどの登壇者について、女性会員の

割合と比較してみると、健康・スポーツ科学系団体では全体に、一般発表者の女性割合に対して、登壇者と座長の女性割合が低かった。一方、看護学系では、一般発表者や座長の女性割合に対して、登壇者の女性割合が顕著に低い傾向がみられた（図 15-1）。下位分野別にみると、すべての分野で一般発表者の女性の割合は女性会員の割合よりも高かった。しかし、女性の座長と登壇者においてはすべての分野で女性会員よりも低い割合に留まり、特に自然科学系団体の女性座長は顕著に低い割合が示された（図 15-2）。



③ 学会大会等におけるテーマ設定

学会大会等における男女共同参画に関するテーマ設定の有無は、健康・スポーツ科学系団体で約3割、看護系団体では約1割で、女性会員の割合が低いグループにおいて比較的高い割合が示され、男女共同参画への関心が伺えた（図 16-1）。下位分野別にみると、人文社会科学系団体において比較的多く設定されていた（図 16-2）。



以下に、学会のシンポジウムなどで、男女共同参画の視点から設定されたテーマを列記する。

○健康・スポーツ科学系団体における男女共同参画関連テーマ

- ・ 「21世紀における大阪体育学会の課題：ジェンダー論の視点から」（2000）
- ・ 「スポーツのジェンダー研究を展望する」（2002, 学会大会）
- ・ 「スポーツ・身体・ジェンダー」（2003）
- ・ 「女性とスポーツ」（2004）
- ・ 「スポーツとジェンダー（1）（2）（3）」（2002～2004）
- ・ 「ジェンダーの視点からみた学校教育の課題と展望」（2003, 学会大会）
- ・ 「Gender Mainstreaming and Sport（ジェンダーの主流化とスポーツ）」（2004）
- ・ 「ジェンダーの視点からみたスポーツ解体新書」（2004, 学会大会）
- ・ 「いつまで続くスポーツ界のジェンダーブラインド」（2004, シンポジウム）
- ・ 「身体史からスポーツを考えるー性差はどのように語られてきたかー」（2005, 学会大会）
- ・ 「スポーツにおける多様な身体ー個の尊重を求めてー」（2005, シンポジウム）

- ・ 「女性ランナーはなぜ走り続ける？」 (2006)
- ・ 「カナダにおける女性スポーツ：ジェンダー・エクイティは達成されたか？」 (2006, 講演)
- ・ 「ジェンダー視点から検証する日本のスポーツ政策」 (2006, シンポジウム)
- ・ 「スポーツ・ジェンダー学を展望する ―学会活動を中心に―」 (2007, 講演)
- ・ 「体育学・スポーツ科学における性差認識とジェンダー」 (2007, シンポジウム)

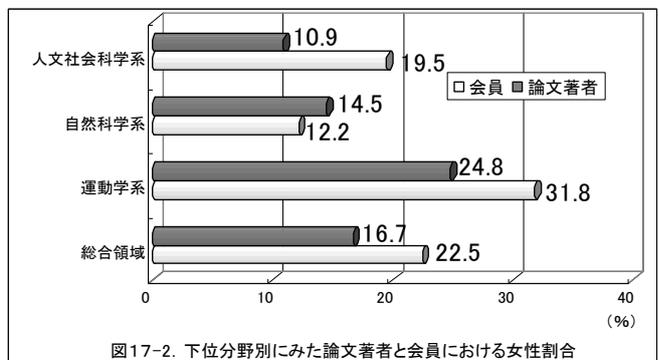
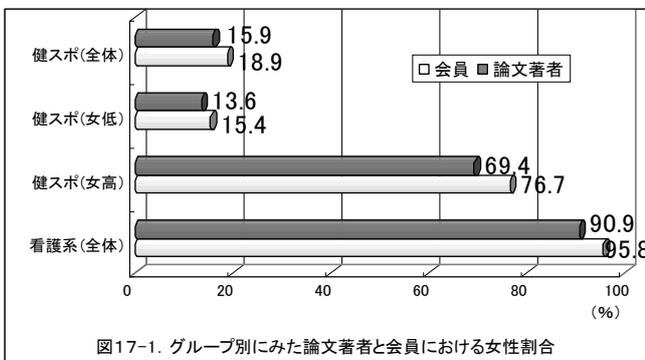
○看護学系団体における男女共同参画関連テーマ

- ・ 「男性看護師の組織化の歴史 ―東海大学医学部付属病院の男性看護師の歴史―」 (2005)
- ・ 「男性看護師の養成の歴史を学ぶ ―看護教育のジェンダー問題を考えるために―」 (2007)

5) 研究成果の評価について

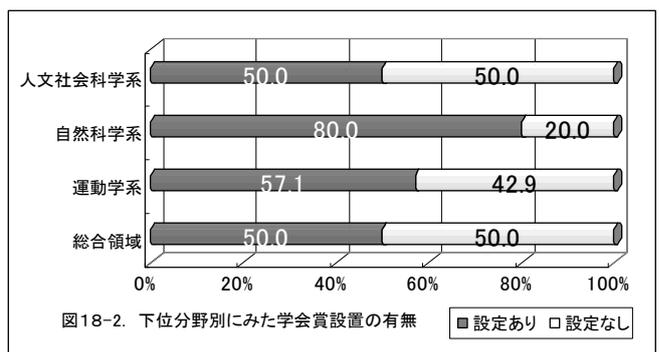
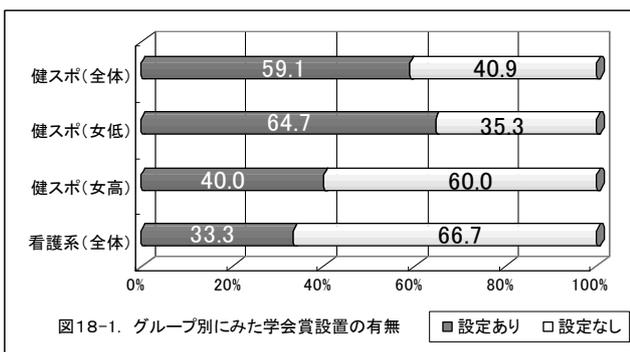
① 研究誌における論文著者

研究誌に掲載された論文著者の女性割合は、いずれのグループにおいても、女性会員の割合に対して低い傾向がみられた (図 17-1)。下位分野別にみると、自然科学系団体において女性の論文著者が女性会員の割合を上回った (図 17-2)。

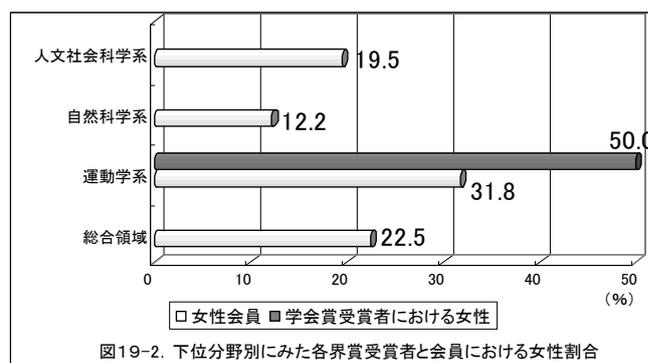
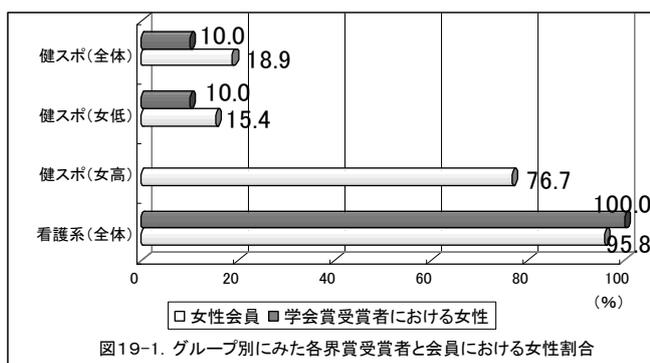


② 学会賞の設置と受賞

学会賞の設置については、男性会員の割合が高いグループほど高い設置率がみられた (図 18-1)。下位分野別にみると、自然科学系団体における学会賞の設置率が顕著に高かった (図 18-2)。



学会賞受賞者の女性の割合は、健康・スポーツ科学系団体においては女性会員の割合よりも低く (図 19-1)、下位分野別にみると、女性の受賞者は運動学系団体に限られ、それ以外の分野での女性受賞者はみられなかった (図 19-2)。



6) 男女共同参画の取り組みについての意見・感想

◆学術研究団体としての男女共同参画への取り組みについての意見・感想(自由記述)

- ・ 本学会は、舞踊を中心に研究する学会のため、設立時より女性中心となっている。しかしながら、年ごとに男性の会員も増えている。学会としては、特に女性、男性を意識した運営はしていない。
- ・ 近年の競技スポーツにおける女性の記録のめざましい進歩は、女性のもつ本来の能力を十分に発揮するチャンスが増えてきたことを反映していると思われる。こういった点について、トレーニング科学の観点から知見を集積したいと考えている。また、男女共同参画に関する学会の方向性について、女性からの意見を求める場をより多くしていきたいと思う。
- ・ 本学会では、男女共同参画について特別な意識をもって活動はしていないが、各種委員会委員として女性が学会運営にたずさわっている。
- ・ 改めて調査データを整理しながら、本学会で女性に積極的に活躍してもらう場を整備する必要性を痛感した。今後、理事会等でも議案として検討したいと思う。
- ・ 私たちの学会では、これまでの活動において性別を意識した活動は行っていない。性別を問わず、一学会員として全員が活動に参加できる活動をしている。しかしながら役員構成などについては、会員の男女数などのこともあり、自然と男性が多くなっているのが現状である。
- ・ 男女共同参画はもとより、近年、女性ランナーの急増など女性ランニングの隆盛がある中、本学会としても女性がより積極的に活躍していけるよう組織的な改革等の必要性を痛感している。
- ・ ジェンダーの主流化が国際的にも重要な課題となりつつある今、人間生活の諸側面にわたって「知」の創造にかかわる学術団体そのものが、従来の「知」のあり方のゆがみに対して敏感であることが求められている。その意味で、男女共同参画を視野に入れた組織作りへの取り組みは、率先して行われるべきと考えている。学術会議においても、常設の「科学者委員会」の下に「男女共同参画分科会」を、また、課題別の委員会として「学術とジェンダー委員会」を設置するなど、この課題については以前から積極的に取り組んでいる。これに伴って、この課題に関する会長コメントや対外報告などが多数みられる。健康・生活科学委員会 健康・スポーツ科学分科会においても、この趨勢を受け止め、調査はもとより積極的な改善策の提示と実行をお願いしたい。
- ・ 今後とも、男女共同参画について取り組んでいきたいと思う。
- ・ 本領域への女性の参画が極めて少ないのが現状であり、まずは女性に積極的に参画してもらえそうな環境づくりを考えたい。
- ・ 本学会が男女共同参画の手本になるような学会運営組織になるよう留意したいと思う。
- ・ 男女という観点では、考えていない。
- ・ 本学会は女性会員が多いが、男性会員の起案による分科会発表などを取り入れ、積極的に共同参

画に動き始めているところである。今後も男性にも参加しやすいような学会運営に努めていきたいと思う。

- ・ 本学会では、選挙管理委員に女性を含めることを原則としている。学会大会で託児所を設けるなどの工夫をしているが、それ以外には男女共同参画の取り組みについて本格的に議論したことはない。しかし、非常に重要な課題であると認識しているので、役員のあり方などについては検討したいと考えている。

(5) 調査結果のまとめ

1) 団体内の既存調査

過去に、団体内で男女共同参画に関する調査を実施した団体はみられなかった。従って、本調査は回答が得られたすべての対象団体にとって最初の男女共同参画に関する調査になった。

2) 団体の人数構成について

① 団体の規模

健康・スポーツ科学系団体は、看護学系団体に比較して、比較的小規模な団体が多く、会員 600 人以下の団体が健康・スポーツ科学系団体の 77.3% を占めた。下位分野別にみると、自然科学系団体に規模の大きい団体が多くみられた。健康・スポーツ科学系団体では、女性会員の割合が 4 割未満と 6 割以上の団体に二分された。女性会員の割合が高いグループは、いずれも会員 600 人以下で、会員 200 人以下の小規模団体が半数以上を占めた。

② 会員の男女比

健康・スポーツ科学系団体全体では、女性会員の割合が 18.9% と 2 割に満たないが、看護学系団体では 95% 以上を占めていた。健康・スポーツ科学系団体のうち、女性会員の割合が高いグループでは、女性会員の割合の平均は 76.7% であり、低いグループでは 15.4% であった。下位分野別にみると、運動学系団体が 31.8% と最も女性会員の割合が高く、最も少ないのは自然科学系団体の 12.2% であった。運動学系団体では団体による差が大きく、女性会員の割合が高い団体と低い団体に明確に二分され、前者は舞踊や体操に関する団体であった。

③ 組織運営における女性の参画

a. 団体の代表者

会長と理事長における女性の割合は、女性会員の割合が高いグループではいずれも 5 割を占めたが、女性会員の割合が低いグループでは、女性の会長は不在であった。下位分野別にみると、自然科学系団体では会長・理事長とも女性が不在であった。

次に、副会長、副理事長、顧問を含めて、女性の割合を比較したところ、健康・スポーツ科学系団体では、いずれのグループでも会長より副会長が、また理事長よりも副理事長の女性割合が高かった。下位分野別にみると、自然科学系団体ではすべての役職者に女性が不在であった。

b. 歴代会長・理事長

健康・スポーツ科学系団体全体では、女性会員の割合に比して女性の歴代会長・理事長が占める割合は低く、その傾向は特に女性会員の割合が低い (15.4%) グループにおいて顕著であった (0.7%)。これに対し、女性会員の割合が高い (76.7%) 健康・スポーツ科学系団体および看護学系団体 (95.8%) では、逆に女性の歴代会長・理事長が占める割合が女性会員の割合よりも高い傾向がみられた (87.5%、100.0%)。下位分野別にみると、運動学系団体において比較的高い歴代会長・理事長の割合が示された (23.1%)。

c. 意思決定機関の役員

健康・スポーツ科学系団体では、女性会員の割合の高低にかかわらず、女性会員の割合に対して意思決定機関の女性の割合が低かった。下位分野別では、運動学系団体において顕著に意思決定機関における女性の割合が高い(42.1%)が、自然科学系団体では、女性会員の割合の約半分(6.6%)に留まった。さらに、各下位分野の団体をみると、いずれの分野も半数以上の団体で意思決定機関の女性割合は19%以下であった。意思決定機関の女性割合が5割を越えていたのは運動学系団体の約4割と総合領域の一部の団体であった。

会員と意思決定機関における女性割合の関係では、女性会員の割合が7割以上を占めると、意思決定機関における女性の割合が5割を超えていた。女性会員の割合が2割前後の団体においては、意思決定機関における女性割合が2~4割程度の団体がみられたものの、女性会員の割合が7割未満の多くの団体で、意思決定機関の女性割合が2割に満たなかった。

次に、女性会員の割合別に、理事・常任理事・評議員の女性割合と女性会員割合を比較すると、女性の会員割合の低いグループでは、女性会員13.4%に対し、女性理事10.7%、女性会員の割合の高いグループでは、女性会員76.7%に対し、女性理事が57.8%であり、いずれも会員割合より低かった。下位分野別にみると、自然科学系団体では女性会員12.2%に対し、女性理事は7.6%と低かったが、運動学系団体では会員・理事とも約3割を占め、常任理事(54.0%)や評議員(85.7%)ではさらに高い割合が示された。

d. 委員会委員長

健康・スポーツ科学系の分野別にみると、女性委員長の割合は、運動学系団体において女性会員の割合(31.8%)を上回った(34.4%)が、それ以外の分野では女性会員の割合を下回った。

次に、委員会の種類別に委員長の女性割合をみると、健康・スポーツ科学系全体では、研究委員会(62.5%)と国際交流委員会(57.1%)、庶務委員会(50.0%)で女性の委員長が5割に達しているが、編集委員会(4.8%)と渉外委員会(14.3%)では女性委員長の割合が低かった。下位分野別にみると、運動学系団体は編集委員会を除くすべての委員会で女性の委員長がみられたが、自然科学系団体では研究委員会(50.0%)と総務委員会(25.0%)、人文社会科学系団体では研究委員会(100.0%)と国際交流委員会(50.0%)において女性委員長がみられた。

3) 団体の運営について

① 役員選出方法

意思決定機関において議決権をもつ役員の選出方法については、いずれのグループでも「立候補者のない直接選挙」が最も高い割合を示したが、看護学系団体と比較した場合、健康・スポーツ科学系団体では「役員による推薦」の割合が高いのが特徴である。下位分野別にみると、「間接選挙」を用いているのは総合領域の団体だけであった。

② 役員選出の際の工夫

役員選出の際に性別による偏りが生じないように工夫をしているかについては、女性の会員割合が高いグループほど「特に工夫はしていない」傾向がみられ、女性会員の割合が低いグループでは、40%の団体で「会長推薦枠などで補う」と回答していた。下位分野別にみると、「会長推薦枠などで補う」傾向が高いのは人文社会科学系と運動学系の団体であった。総合領域の団体では、明確な基準として「両性が一定以上の割合になるように割合の目安や基準を設けている」団体がみられた。

4) 行事の運営について

① 施設設置

学会大会などの行事の際の男女共同参画を促進する施設設置の有無については、約2割の団体で「保

育室・託児所」を設置しており、女性会員の割合が高いグループほど設置率が高い傾向がみられた。看護学系団体では「授乳室」を設置している団体も 12.5%みられた。下位分野別にみると、「保育室・託児所」の設置は、運動学系団体において最も高く（28.6%）、総合領域の団体で最も低い傾向がみられた（16.7%）。

② 学会大会における登壇者

健康・スポーツ科学系団体では全体に、一般発表者の女性割合（25.1%）に対して、講師やシンポジストなどの登壇者（16.2%）と座長（13.2%）の女性割合が低かった。一方、看護学系では、一般発表者（93.8%）や座長（96.1%）の女性割合に対して、登壇者の女性割合（73.2%）が顕著に低い傾向がみられた。下位分野別にみると、すべての分野で女性会員の割合よりも一般発表者の女性の割合が高かった。しかし、女性の座長と登壇者においてはすべての分野で女性会員よりも低い割合に留まり、特に自然科学系団体の女性座長（1.1%）は顕著に低い割合が示された。

③ 学会大会等におけるテーマ設定

学会大会等における男女共同参画に関するテーマ設定の有無は、健康・スポーツ科学系団体で約3割、看護系団体では約1割で、女性会員の割合が低いグループにおいて比較的高い割合が示され（35.3%）、男女共同参画への関心が伺えた。下位分野別にみると、人文社会科学系団体において比較的多く設定されていた（50.0%）。

5) 研究成果の評価について

① 研究誌における論文著者

研究誌に掲載された論文著者の女性割合は、いずれのグループにおいても、女性会員の割合に対して低い傾向がみられた。しかし、下位分野別にみると、自然科学系団体において女性の論文著者（14.5%）が女性会員の割合（12.2%）を上回った。

② 学会賞の設置と受賞

学会賞の設置については、男性会員の割合が高いグループほど高い設置率がみられた。下位分野別にみると、自然科学系団体における学会賞の設置率が顕著に高かった（80.0%）。

学会賞受賞者の女性の割合は、健康・スポーツ科学系団体においては女性会員の割合（18.9%）よりも低く（10.0%）、下位分野別にみると、女性の受賞者は運動学系団体に限られ（50.0%）、それ以外の分野での女性受賞者はみられなかった。

6) 男女共同参画の取り組みについての意見・感想

学会としては、性別を意識した活動や男女共同参画について特別な意識をもって活動はしていないという感想が複数の団体から述べられた（4団体）。また、役員構成などは、会員の男女比などの関係から、自然と男性が多くなっているのが現状であること、「男女共同参画の取り組みについて本格的に議論したことはない」という報告もみられた。

男女共同参画に配慮した取り組みがなされている報告例としては、「選挙管理委員に女性を含めることを原則としている」「各種委員会委員として女性が学会運営にたずさわっている」という意見が述べられた。

今後の展望として、男女共同参画に前向きに取り組む姿勢が示された意見には次のものがあげられる。「男女共同参画に関する学会の方向性について、女性からの意見を求める場をより多くしていきたい」「女性がより積極的に活躍していけるよう組織的な改革等の必要性を痛感している」（類似2件）「女性の参画が極めて少ないのが現状であり、まずは女性に積極的に参画してもらえるような環境づくりを考えたい」

「非常に重要な課題であると認識しているので、役員のあり方などについては検討したい」

また、女性会員が多い団体からは「男性会員の起案による分科会発表などを取り入れ、積極的に共同参画に動き始めているところである。今後も男性にも参加しやすいような学会運営に努めていきたい」という意見も述べられた。

本分科会への要望としては、「男女共同参画を視野に入れた組織作りへの取り組みは、率先して行われるべき」で、「健康・生活科学委員会 健康・スポーツ科学分科会においても、調査はもとより積極的な改善策の提示と実行をお願いしたい」という意見がみられた。

3. 本調査の意義

a. **本調査の意義**：本調査の実施が、回答が得られたすべての関連学術研究団体において、初回の男女共同参画に関する調査であったことから、学術研究団体における男女共同参画への意識を覚醒させる機会になったといえる。また、これまで把握されることのなかった健康・スポーツ科学関連分野の学術研究団体における男女共同参画の実態が明らかになったことは、今後の本分野の発展を考える上で意義があったと思われる。

b. **本分野の男女共同参画の特徴**：健康・スポーツ科学系団体の特徴として、比較的小規模な女性の多い団体と大規模な団体を含む男性の多い団体に二分されている。女性会員の割合が高い団体は、舞踊や体操、ジェンダー、次いで子どもや教育に関する団体などで、健康・スポーツ科学関連分野の中でも性別役割分業の傾向がみてとれる。意思決定機関や役職者等における女性の割合は、女性の多い団体では過半数を超えているが、女性の少ない団体では女性会員の割合よりも顕著に低く、そのことが女性の能力を十分発揮しにくい環境を作り上げていると考えられる。例えば、自発的な研究活動である一般発表の女性割合は、女性会員の割合を上回ったが、組織が決定する座長や講演・シンポジウムの登壇者においては、一般発表者はもとより会員の女性割合をも下回っている点などがあげられる。

c. **男女共同参画への意識**：「役員選出の際の工夫」に関する結果より、女性会員の少ない団体において、より男女共同参画への意識がはたらいっていることが示されたが、分野別の傾向としては、人文社会科学系団体において比較的意識が高く、自然科学系団体においては意識が低い傾向がみられた。しかし、各団体から寄せられた意見や感想には、特定の分野に限らず、男女共同参画への組織的な取り組みの必要性を感じているという感想がいくつか述べられていることから、今後の展開が期待される。また、女性が多い団体の男女共同参画についても配慮していく必要があるであろう。こうした取り組みを進めていくためには、団体の枠を超えた情報交換や意見交換が重要になると考えられる。本分科会が今後も関連学術研究団体における男女共同参画の推進に向けて何らかの役割を担うことが求められる。

4. 今後の課題 ー学術研究団体における男女共同参画の推進に向けてー

a. 今後も定期的・継続的に多方面から関連学術研究団体に男女共同参画に関するアンケート調査を実施し、結果を公表することが必要である。具体的には、以下のような調査の実施が求められる。①健康・スポーツ科学関連分野の学術研究団体に所属している女性会員へのアンケート調査、②全国の大学等の研究機関における体育教員に関する調査、③全国の体育系大学・体育教員養成大学における女子学生の割合。さらには、こうした調査結果が健康・スポーツ科学関連以外の分野や、外国のデータとの比較が行われることが望ましい。多方面からの調査を実施することにより、男女共同参画を阻害している要因があればそれを明らかにすることが求められる。その際、仕事と家庭生活とのバランスの中で議論していく必要がある。

- b. 関連分野の学術連合や分科会との連携団体を対象に、男女共同参画に関するシンポジウム等を企画し、現状報告や今後の取り組みに向けての意見交換を行う場を設定することが求められる。
- c. 「男女共同参画学協会連絡会」への参加など、分野を超えて男女共同参画に関する連携を図ることが重要である。

注

注1) その他の女性比率に関するデータ

- ・研究者に占める女性の割合が高い国は、ラトビア 51.5%、リトアニア 48.6%、ブルガリア 46.2%などとなっている（内閣府『平成 20 年度男女共同参画白書』）。
- ・大学教員の女性比率 17.4%（平成 18 年度）。ただし、分野による偏差が著しい。
- ・民間企業の研究者全体に占める女性割合 6.6%。平成 14 年頃から育児休職制度などの環境整備や女性の管理職登用が進展したが、管理職比率は 12.0%程度にとどまっている。
- ・医師国家試験合格者に占める女性比率は約 4 割、女性医師比率は 16.4%（平成 16 年）で増加傾向にあるが、30 歳代の中断や退職が目立つ。
- ・独立行政法人理化学研究所（国内 7 か所、海外 3 か所の研究拠点を有する）の女性 PI（指導的地位にあり研究室を主宰する者）7.2%を含む女性研究者の割合は 17.2%。

注 2) 日本学術会議における男女共同参画への取組

- ・第 17 期 「女性科学者の環境改善の具体的措置について（要望）」「日本学術会議における男女共同参画の推進について（声明）」が採択され、公表（平成 12 年）。
- ・第 18 期 日本学術会議「ジェンダー問題の多角的検討のための特別委員会」；対外報告「ジェンダー問題と学術の再構築」（平成 15 年 5 月）
- ・第 19 期 日本学術会議「ジェンダー学研究連絡委員会」と「21 世紀の社会とジェンダー研究連絡委員会」が設置。対外報告「男女共同参画社会の実現に向けてージェンダー学の役割と重要性」（平成 17 年 6 月）
- ・第 20 期 日本学術会議 科学者委員会男女共同参画分科会では「学術分野における男女共同参画体制の整備・推進」を主眼として活動。
対外報告「学術分野における男女共同参画の取組と課題」平成 19（2007）年 7 月
提言「学術分野における男女共同参画促進のために」平成 20（2008）年 7 月
- ・第 20 期 課題別委員会「学術とジェンダー委員会」では、男女共同参画のための「ジェンダー関連分野の学際的研究の促進」を目指す。対外報告「提言：ジェンダー視点が拓く学術と社会の未来」（平成 18 年 11 月）

注 3) 調査結果に基づく科学技術分野における男女共同参画に関する 4 項目の提言

- ①両立支援推進と性別役割分担の是正、②採用・昇格等の評価における性差別の排除、③任期制ポストにおける不合理な年齢制限撤廃、④非常勤職研究者のための研究助成制度の拡充、などの課題が指摘され、女性研究者支援への配慮が要望された。

注4) 大学における男女共同参画の取組例

- ・女性教員増加のためのポジティブ・アクション（積極的改善措置）の表明：公募人事ホームページの

冒頭に「名古屋大学は業績（研究業績、教育業績、社会的貢献、人物を含む）の評価において同等と認められた場合には、女性を積極的に採用します。」との文言を掲示した（平成 17 年 12 月に決定）。この表明は、男女共同参画の実現のために女性教員比率の向上が不可欠であるとの認識に基づき、女性研究者・大学院学生の教員公募への応募を促すためのものである。本ポジティブ・アクションの表明は、女性を採用することを各部局に強制するものではないが、女性教員の増員に対して一定の効果があるものと考えられている。（名古屋大学）

- ・育児支援活動—学内保育所の設置：利用者から、学内に安心して子どもを預ける施設があることにより、仕事と育児の両立が容易になったとの声が聞かれるなど、大きな成果が認められている。（名古屋大学）
- ・学生に対する活動—ジェンダーに関する講義の新設と教科書の出版—（名古屋大学）
- ・「女性教員数増加を目指した部局長ヒアリング」の実施：学内の全部局を対象とした「男女共同参画に関するアンケート調査」及び各部局長を対象としたヒアリングを平成 13 年度より毎年 1 回実施。同ヒアリングでは、部局別に女性教員の採用目標を設定するとともに、各部局に対して男女共同参画の理念を周知徹底。さらに、各部署の現状に即した女性教員数増加のための具体的な提案を求め、有効施策の整備・実施に活用している。（名古屋大学）
- ・実態調査 WG：毎年、男女共同参画に関する各種アンケート調査を実施し、各年度の報告書において結果を公開。（東北大学）
- ・奨励制度 WG：男女共同参画奨励賞を平成 14 年度に制定し、奨励制度 WG を中心に受賞者を選考。研究部門、活動部門、プロジェクト部門（今後予定する研究及び活動）の 3 部門について受賞者を決定。各受賞者は、受賞年またはその 2 年後（プロジェクト部門の場合）のシンポジウムにおいて講演を行い、ジェンダー研究や男女共同参画に関する活動の周知を図っている。（東北大学）

資 料

表1. 団体の人数構成(図1、図3-1、図3-2)

人数	全体	健康・スポーツ科学系							看護系
		全体	女性割合低	女性割合高	人文社会科学系	自然科学系	運動科学系	総合領域	全体
100-199	6	6	3	3	2	0	2	2	0
200-399	7	5	4	1	1	1	1	2	2
400-599	6	6	5	1	1	0	4	1	0
600-799	2	1	1	0	0	1	0	0	1
800-999	1	0	0	0	0	0	0	0	1
1000-1999	4	2	2	0	0	2	0	0	2
2000-2999	1	0	0	0	0	0	0	0	1
3000-3999	1	0	0	0	0	0	0	0	1
4000-4999	1	1	1	0	0	1	0	0	0
5000-5999	2	1	1	0	0	0	0	1	1
合計	31	22	17	5	4	5	7	6	9

※数値は団体数

表2. 女性会員の割合別にみた団体数
(図2-1、図2-2)

女性会員の割合	健スポ(全体)		看護系(全体)	
	n	%	n	%
0-9%	3	13.7	0	0
10-19%	9	40.9	0	0
20-29%	4	18.2	0	0
30-39%	1	4.5	0	0
40-49%	0	0	0	0
50-59%	0	0	0	0
60-69%	1	4.5	0	0
70-79%	1	4.5	0	0
80-89%	3	13.7	0	0
90-100%	0	0	8	88.9
NA	0	0	1	11.1
合計	22	100.0	9	100.0

表3. 各グループ別にみた会員における男女比(図4-1、図4-2、図4-3)

		全体	健康・スポーツ科学系							看護系
			全体	女性割合低	女性割合高	人文社会科学系	自然科学系	運動科学系	総合領域	全体
女性	n	17,807	3,747	2,860	887	225	1,081	819	1,622	14,060
	%	51.7	18.9	15.4	76.7	19.5	12.2	31.8	22.5	95.8
男性	n	16,655	16,036	15,766	270	930	7,752	1,760	5,594	619
	%	48.3	81.1	84.6	23.3	80.5	87.8	68.2	77.5	4.2
合計		34,462	19,783	18,626	1,157	1,155	8,833	2,579	7,216	14,679

表4. 下位分野にみた会員の女性割合別団体割合(図4-4)

		人文社会科学系		自然科学系		運動学系		総合領域	
		n	%	n	%	n	%	n	%
会員 女性に 割合 ける	0~9%	0	0	1	20.0	2	28.6	0	0
	10-19%	3	75.0	4	80.0	2	28.6	2	33.2
	20-29%	1	25.0	0	0	0	0	1	16.7
	30-39%	0	0	0	0	0	0	1	16.7
	60-69%	0	0	0	0	0	0	1	16.7
	70-79%	0	0	0	0	1	14.2	1	16.7
	80-89%	0	0	0	0	2	28.6	0	0
	合計	4	100.0	5	100.0	7	100.0	6	100.0

表5. 全会員と各役職における女性割合(図5-1、図5-2、図6-1、図6-2)

			健康・スポーツ科学系							看護系
			全体	女性割合低	女性割合高	人文社会科学系	自然科学系	運動科学系	総合領域	全体
会員	女性	n	3,747	2,860	887	225	1,081	819	1,622	14,060
		%	18.9	15.4	76.7	19.5	12.2	31.8	22.5	95.8
	男性	n	16,036	15,766	270	930	7,752	1,760	5,594	619
	合計	n	19,783	18,626	1,157	1,155	8,833	2,579	7,216	14,679
会長	女性	n	2	0	2	0	0	1	1	0
		%	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	1.0	1.0	0.0
	男性	n	17	15	2	4	4	6	3	0
	合計	n	2	0	2	0	0	1	1	0
副会長	女性	n	5	0	5	0	0	5	0	0
		%	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	1.0	0.0	0.0
	男性	n	19	18	1	4	1	9	5	0
	合計	n	5	0	5	0	0	5	0	0
理事長	女性	n	3	1	2	1	0	1	1	9
		%	1.0	1.0	1.0	1.0	0.0	1.0	1.0	1.0
	男性	n	15	13	2	2	4	5	4	0
	合計	n	3	1	2	1	0	1	1	9
副理事長	女性	n	2	1	1	0	0	2	0	6
		%	1.0	1.0	1.0	0.0	0.0	1.0	0.0	1.0
	男性	n	3	3	0	0	0	3	0	1
	合計	n	2	1	1	0	0	2	0	6
顧問	女性	n	3	0	3	0	0	3	0	0
		%	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	1.0	0.0	0.0
	男性	n	27	18	9	0	3	12	12	0
	合計	n	3	0	3	0	0	3	0	0

表6. 歴代会長・理事長、意志決定機関における女性割合

(図7-1、図7-2、図8-1、図8-2)

		健康・スポーツ科学系								看護系
		全体	女性割合低	女性割合高	人文社会科学系	自然科学系	運動科学系	総合領域	全体	
・歴代会長 理事長	女性	n	9	1	8	1	0	6	2	163
		%	5.0	0.6	50.0	3.7	0.0	23.1	3.3	99.4
	男性	n	171	163	8	26	66	20	59	1
		合計	n	180	164	16	27	66	26	61
意志決定 機関	女性	n	230	111	119	10	75	114	31	521
		%	13.5	7.3	65.0	17.9	6.6	42.1	13.5	96.8
	男性	n	1,471	1,407	64	46	1,070	157	198	17
		合計	n	1,701	1,518	183	56	1,145	271	229

表7. 下位分野別にみた意志決定機関における

女性割合別団体割合(図8-3)

		意志決定機関における女性割合			合計
		19%以下	20~49%	50~89%	
人文社会科学系	n	2	2	0	4
	%	50.0	50.0	0.0	100.0
自然科学系	n	4	1	0	5
	%	80.0	20.0	0.0	100.0
運動学系	n	4	0	3	7
	%	57.1	0.0	42.9	100
総合領域	n	4	1	1	6
	%	66.6	16.7	16.7	100.0

表8. 会員と意志決定機関における女性割合のクロス(図8-4)

		意志決定機関における女性割合			合計	
		19%以下	20~49%	50~89%		
会員における 女性割合	0~9%	n	3	0	0	3
		%	100.0	0.0	0.0	100.0
	10-19%	n	9	2	0	11
		%	81.8	18.2	0.0	100.0
	20-29%	n	0	2	0	2
		%	0.0	100.0	0.0	100.0
	30-39%	n	1	0	0	1
	%	100.0	0.0	0.0	100.0	
60-69%	n	1	0	0	1	
	%	100.0	0.0	0.0	100.0	
70-79%	n	0	0	2	2	
	%	0.0	0.0	100.0	100.0	
80-89%	n	0	0	3	3	
	%	0.0	0.0	100.0	100.0	

表9. 各意志決定機関における男女別人数と女性割合(図9-1、図9-2)

		健康・スポーツ科学系								看護系
		全体	女性割合低	女性割合高	人文社会科学系	自然科学系	運動科学系	総合領域	全体	
理事会	女性	n	100	37	63	10	8	57	25	108
		%	21.1	10.7	57.8	17.9	7.6	30.6	19.7	97.3
	男性合計	n	374	308	46	46	97	129	102	3
		n	474	345	109	56	105	186	127	111
理事常任会	女性	n	30	4	26	0	2	27	1	0
		%	46.2	15.4	66.7	0.0	33.3	54.0	11.1	0.0
	男性合計	n	35	22	13	0	4	23	8	0
		n	65	26	39	0	6	50	9	0
評議会	女性	n	100	69	30	0	65	30	5	413
		%	8.6	6.6	85.7	0.0	6.3	85.7	5.4	96.7
	男性合計	n	1,062	978	5	0	969	5	88	14
		n	1,162	1,047	35	0	1,034	35	93	427

表10. 委員会委員長の男女別人数と女性割合

(図10-1、図10-2、図11-1、図11-2)

		健康・スポーツ科学系								看護系
		全体	女性割合低	女性割合高	人文社会科学系	自然科学系	運動科学系	総合領域	全体	
総務	女性	n	2	1	1	0	1	1	0	6
		%	20.0	11.1	100.0	0.0	25.0	50.0	0.0	100.0
	男性合計	n	8	8	0	2	3	1	2	0
		n	10	9	1	2	4	2	2	6
庶務	女性	n	2	1	1	0	0	1	1	5
		%	40.0	25.0	100.0	0.0	0.0	33.3	50.0	100.0
	男性合計	n	3	3	0	0	0	2	1	0
		n	5	4	1	0	0	3	2	5
広報	女性	n	3	0	3	0	0	2	1	7
		%	23.1	0.0	100.0	0.0	0.0	40.0	25.0	100.0
	男性合計	n	10	10	0	2	2	3	3	0
		n	13	10	3	2	2	5	4	7
渉外	女性	n	1	0	1	0	0	1	0	3
		%	12.5	0.0	50.0	0.0	0.0	33.3	0.0	100.0
	男性合計	n	7	6	1	2	1	2	2	0
		n	8	6	2	2	1	3	2	3
研究	女性	n	5	3	2	2	1	1	1	7
		%	55.6	50.0	66.7	100.0	50.0	33.3	50.0	100.0
	男性合計	n	4	3	1	0	1	2	1	0
		n	9	6	3	2	2	3	2	7
編集	女性	n	1	0	1	0	0	0	1	8
		%	4.5	0.0	20.0	0.0	0.0	0.0	16.7	88.9
	男性合計	n	21	17	4	4	5	7	5	1
		n	22	17	5	4	5	7	6	9
国際交流	女性	n	4	1	3	1	0	2	1	5
		%	50.0	20.0	100.0	50.0	0.0	100.0	33.3	100.0
	男性合計	n	4	4	0	1	1	0	2	0
		n	8	5	3	2	1	2	3	5
その他	女性	n	3	0	3	0	0	3	0	28
		%	7.7	0.0	60.0	0.0	0.0	42.8	0.0	96.6
	男性合計	n	36	34	2	3	16	4	13	1
		n	39	34	5	3	16	7	13	29
委員会全体	女性	n	21	6	15	3	2	11	5	69
		%	18.4	6.6	65.2	17.6	6.5	34.4	14.7	97.2
	男性合計	n	93	85	8	14	29	21	29	2
		n	114	91	23	17	31	32	34	71

表11. 役員選出方法(多重回答)(図12-1、図12-2)

	健康・スポーツ科学系							看護系
	全体 n=22	女性割 合低 n=17	女性割 合高 n=5	人文 社会 科学系 n=4	自然 科学系 n=5	運動 科学系 n=7	総合 領域 n=6	全体 n=9
立候補者への直接選挙	n 2	1	1	0	1	0	1	2
%	9.1	5.9	20.0	0.0	20.0	0.0	16.7	22.2
立候補者のない直接選	n 14	12	2	3	3	5	3	6
%	63.6	70.6	40.0	75.0	60.0	71.4	50.0	66.7
間接選挙	n 2	2	0	0	0	0	2	1
%	9.1	11.8	0.0	0.0	0.0	0.0	33.3	11.1
役員による推薦	n 10	8	2	2	1	4	3	2
%	45.5	47.1	40.0	50.0	20.0	57.1	50.0	22.2

表12. 役員選出の際の工夫(多重回答)(図13-1、図13-2)

	健康・スポーツ科学系							看護系
	全体 n=22	女性割 合低 n=17	女性割 合高 n=5	人文 社会 科学系 n=4	自然 科学系 n=5	運動 科学系 n=7	総合 領域 n=6	全体 n=9
割合の目安や基準	n 1	1	0	0	0	0	1	0
%	4.5	5.9	0.0	0.0	0.0	0.0	16.7	0.0
会長推薦枠	n 6	6	0	2	1	3	0	0
%	27.3	35.3	0.0	50.0	20.0	42.9	0.0	0.0
常態	n 6	3	3	1	1	1	3	2
%	27.3	17.6	60.0	25.0	20.0	14.3	50.0	22.2
その他	n 0	0	0	0	0	0	0	1
%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	11.1
特に工夫なし	n 8	6	2	1	2	3	2	6
%	36.4	35.3	40.0	25.0	40.0	42.9	33.3	66.7

表13. 行事の際の施設設置(多重回答)(図14-1、図14-2)

	健康・スポーツ科学系							看護系
	全体 n=22	女性割 合低 n=17	女性割 合高 n=5	人文 社会 科学系 n=4	自然 科学系 n=5	運動 科学系 n=7	総合 領域 n=6	全体 n=9
保育室・託児所	n 5	4	1	1	1	2	1	2
%	22.7	23.5	20.0	25.0	20.0	28.6	16.7	22.2
授乳室	n 0	0	0	0	0	0	0	1
%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	11.1
特になし	n 17	13	4	3	4	5	5	6
%	77.3	76.5	80.0	75.0	80.0	71.4	83.3	66.7

表14. 一般発表者、座長、登壇者における男女別人数と女性割合(図15-1、図15

		健康・スポーツ科学系								看護系
		全体	女性割合低	女性割合高	人文社会科学系	自然科学系	運動科学系	総合領域	全体	
一般発表者	女性	n	317	250	67	1,267	26	67	69	155
		%	25.1	21.2	76.1	93.9	23	16.7	42.9	26.3
	男性	n	948	927	21	83	87	334	92	435
		合計	n	1265	1,177	88	1,350	113	401	161
座長	女性	n	40	26	14	123	7	1	8	24
		%	13.2	9.6	43.8	96.1	15.6	1.1	25.8	17.5
	男性	n	262	244	18	5	38	88	23	113
		合計	n	302	270	32	128	45	89	31
登壇者	女性	n	75	47	28	109	2	11	21	41
		%	16.2	11.2	66.7	73.2	14.3	6.6	26.6	20.1
	男性	n	388	374	14	40	12	155	58	163
		合計	n	463	421	42	149	14	166	79

表15. 男女共同参画テーマの設置の有無(図16-1、図16-2)

		健康・スポーツ科学系								看護系
		全体	女性割合低	女性割合高	人文社会科学系	自然科学系	運動科学系	総合領域	全体	
設定あり	n	7	6	1	2	1	2	2	1	
	%	31.8	37.5	20.0	50.0	20.0	28.6	33.3	11.1	
設定なし	n	15	10	4	2	4	5	4	8	
	%	68.2	62.5	80.0	50.0	80.0	71.4	66.7	88.9	
合計	n	22	16	5	4	5	7	6	9	

表16. 論文著者における男女別人数と女性割合(図17-1、図17-2)

		健康・スポーツ科学系								看護系
		全体	女性割合低	女性割合高	人文社会科学系	自然科学系	運動科学系	総合領域	全体	
女性	n	137	112	25	299	6	79	25	27	
	%	15.9	13.6	69.4	90.9	10.9	14.5	24.8	16.7	
男性	n	724	713	11	30	49	464	76	135	
	合計	n	861	825	36	329	55	543	162	

表17. 学会賞設置の有無(図18-1、図18-2)

		健康・スポーツ科学系								看護系
		全体	女性割合低	女性割合高	人文社会科学系	自然科学系	運動科学系	総合領域	全体	
設定あり	n	13	11	2	2	4	4	3	3	
	%	59.1	64.7	40.0	50.0	80.0	57.1	50.0	33.3	
設定なし	n	9	6	3	2	1	3	3	6	
	%	41.0	35.3	60.0	50.0	20.0	42.9	50.0	66.7	
合計	n	22	17	5	4	5	7	6	9	

表18. 学会賞受賞者における男女別人数と女性割合(図19-1、図19-2)

		健康・スポーツ科学系							看護系
		全体	女性割合低	女性割合高	人文社会科学系	自然科学系	運動科学系	総合領域	全体
女性	n	18	18	0	4	5	2	7	0
	%	90.0	90.0	0.0	100.0	100.0	50.0	100.0	0.0
男性	n	2	2	0	0	0	2	0	8
合計	n	20	20	0	4	5	4	7	8